C.L.ドジソン（ルイス・キャロル）の手紙

平　倫　子

クライスト・チャーチ，オックスフォード
1864年　11月11日

拝啓

ここしばらく，『アリスの冒険』[ママ]の表紙の色のことを考えておりましたが，明るい赤が一番いいかと――芸術的にはともかく，こどもの目には一番魅力的なのではないか，と思うに到りました。この色で，お持ちの緑色のものと同じくらいなめらかで明るいクロスを調達していただけますか？

敬具
C.L.ドジソン

クライスト・チャーチ，オックスフォード
1864年　11月20日

拝啓

小著『不思議の国のアリスの冒険』の刊行は，今年は無理なのではないかと懸念しております。テニエル氏から，クリスマスまでに挿絵を完成できる見込みがない，と手紙がきました。理由はわかりませんが，氏は母上を亡くされたばかりでお困りのようです。それで私も，挿絵のことはしばらく忘れるよう伝えておきました。このような情況ですのでこの本の出版の見当をいつ頃と考えればいいか，ご意見を伺いたいと思います。イースターがいいでしょうか，それともそれよりまえがいいでしょうか。

お送り下さった赤いクロスの見本，気に入りました。私は『子どものための名詩選』[2]をまだ見ておりませんが，近いうちに見てこようと思います。

敬具

C.L.ドジソン

クライスト・チャーチ，オックスフォード
1864年　12月16日

親愛なるマクミラン様

昨日，小著のゲラ刷り全部をお送りしました。完全なものはお送りしたもの一部しかありません。おそらく来週火曜日にはこちらでそれが必要になります。あなたが是非お引き受け下さるようにと願っています。

敬具
C.L.ドジソン

クライスト・チャーチ，オックスフォード
1865年　5月24日

拝啓

見本をお送り下さってありがとうございました。あの外観は大変気に入っています。ところで変更していただきたいことが三つあります。

(1) タイトルはあれでは不完全です。次のようにしていただきたいのです。

ALICE'S
ADVENTURES IN
WONDERLAND

(2) 猫が描かれているほうも，表側と同じように，金の線で囲んだらよいと思います。表紙も裏表紙も同じように装飾的に見えるようにしたいのです。

(3) これは私自身まだはっきり決められないのですが――天に金を塗るのは好みません。私はこの本を，応接間の卓上装飾用の本にしたいので，天地と小口はきちんと切りそろえ，金を塗らないほうがいいと思います。

月曜日には出来上がるようのぞんでいます。目下の私の考えでは，私が友人たちに進呈するための五十部を最初に製本していただきたいので，そちらに送ります。二千部のうちのあとの残りは，ご都合のよいときに製本し，今年じゅうの一番良いとお考えの時期に出版して下さい――け

れども私の幼い友だちのために，出来るだけ早く手もとに本が欲しいのです。彼らは驚くほど早く成長し，子ども時代を終えてしまいますから。

この五十部のうちの一冊は，白い子牛皮(ヴェラム)で製本したいのです。残りは見本と同じように赤のクロスでお願いします。

敬具

C.L.ドジソン

クロフト牧師館[3]，ダーリントン

1965年　7月31日

拝啓

びっくりするような見積もり[4]が書かれたお手紙ありがとうございました――オックスフォードでこの本を印刷するよりも，百ポンド以上もかかるとのこと。そんなに多額な追加支出をかけていいとは思えませんが，それはさておき，次にあげる質問にお答えいただきたいのです。

(1) 二千部ではなく一千部の印刷費はいくらになりますか？

(2) クレイ氏〔訳者注：印刷業者の Richard Clay〕は電気製版で印刷してくれるでしょうか？（私はその方がいいと思いますが。）

(3) 初版本をそのように刷り直してもらう場合，オックスフォードですでに印刷された二千部〔訳者注：テニエルが絵の印刷に不満をもったものをさす〕をどう処理すればいいでしょうか。選択肢は四つあります。

(a) 来年までそのままにしておいて，先日助言してくださったように「地方で売る」か，または外国に送る。しかし値段は七シリング六ペンスのままとする。

(b) 広告で二つの版の違いを明示して，粗悪品として安く（たとえば五シリングで）売る。

(c) クレイ氏かほかの経験をつんだ人に目を通してもらい，刷りの良いページだけを選び出してもらったうえ，それらをロンドンで印刷したものに加えて使って，あとの残りは廃棄紙として売る。

(d) 全部廃棄紙として売る。

(a)の場合，私はコーム氏[5]からの請求総額を支払う必要があるのは当然です。その他の場合にはそれぞれ新たな契約を結ばねばなりません。

以上四つのうち，(a)は私としては感心できません。私自身の考えは，むしろ(b)に傾いています。いずれにしましても，あなたのお考えをお知らせいただきたいと思います。

敬具
C.L.ドジソン

クロフト牧師館，ダーリントン
1865年　8月30日

拝啓
友人たちが『アリスの冒険』を是非見たいと言っておりますので，出来るだけ早く二十五部を製本し送っていただきたいのです。いつ送っていただけるかもお教えください。もしすでにあなたが新しい刷りをご覧になっておられましたら，挿絵の刷りがまえのものと比べてどのくらいはっきりした違いがあるかを教えていただけるとありがたいのですが。

敬具
C.L.ドジソン

クライスト・チャーチ，オックスフォード
1865年　11月2日

拝啓
貴社が『アリスの冒険』の広告を出したのを見たのでお手紙を差し上げますが，「多数の」を「四十二枚の」〔訳者注：挿絵の数〕にかえていただきたいのです。私には，「多数の」という言葉は二十かそこらの数を意味するように思われますので。製本ができましたら，何冊か送り届けていただけるとうれしいです。

敬具
C.L.ドジソン

クライスト・チャーチ，オックスフォード
1865年　11月12日

親愛なるマクミラン様
昨日『アリス』二十四部，確かに受け取りました。どうかもう五十部

を，至急お送り下さるようお願いいたします。私に出来るかぎりまえの版を回収し，新しいものと取りかえるつもりでりおりますので。天地と小口を金で仕上げたのはあれで結構だと思います。最初のをそうしたのですから，今後は全部そうしたいと思います。エヴァズレーの牧師〔訳者注：*The Water Babies*（1863）の作者 Cherles Kingsley〕のこの本についての意見を知って，たいへん喜んでおります。

次にまだご返答いただいていない二つの質問についておたずねします。

(1) この本が実際に出版されるのはいつですか。

(2) どの新聞社に本を送るおつもりですか？

これに関してさらに，

(3) 今は組版のままになっていますか。もしそうならば，増刷する場合にそなえて，訂正箇所が二，三あります。

敬具

C.L.ドジソン

クライスト・チャーチ，オックスフォード

1865年　11月19日

親愛なるマクミラン様

五十部と子牛皮(ヴェラム)製一部，たしかに受け取りました。なかに一冊，十六ページ（161ページから176ページまで）の落丁のあるものがありました。この種の手落ちで損をするのが誰かはきまっています。

新聞や雑誌が，万が一この本の書評をするような場合には，書評が出ている号を保存しておきたいのでお送りいただきたいのです。それらを見つけ，集める仕事をやってくれる人を，そちらでだれか見つけられますか？それともボドリアン・ライブラリーでしてもらうようにしましょうか。あそこはあらゆる新聞，雑誌を見ることが出来る数少ない場所のひとつですから。

本の売れゆきが好調かどうか，あなたがどう見ておられるかお聞かせ下さるとありがたいです。

敬具

C.L.ドジソン

クライスト・チャーチ，オックスフォード
1865年　11月28日

親愛なるマクミラン様

『アリス』の最初の刷りの子牛皮(ヴェラム)製本のものが私の手もとにもどってきました。この子牛皮(ヴェラム)を新刷の表紙につけかえてもらえますか。

とり急ぎ

敬具

C.L.ドジソン

クロフト牧師館，ダーリントン
一年の終わりにあたって，リポン大聖堂参事会員公舎[6]にて
1865年　12月27日

拝啓

テニソン夫妻に私から『アリス』の第二刷を一冊送ったということと，それから勝手ながらもう一冊を，あなたからのプレゼントとしてご子息たちに送ってほしい旨を，あなたにお伝えしたかどうか失念してしまいました。

パブリッシャーズ・サーキュラー誌に書評が載ったと聞きましたので，恐れ入りますが同誌を一部送っていただけませんか。タイムズ紙の書評はもちろんご覧になったと思いますが，貴社が広告に使ったガーディアン紙の書評よりもいいですね。

売れゆきがどうなっているか，ぜひ知りたいと思います。

よいお年をお迎え下さい。

敬具

C.L.ドジソン

クライスト・チャーチ，オックスフォード
1866年　3月8日

拝啓

ロンドン・レヴュー誌，ありがとうございました。もっと本が売れるよう望んでいましたが，無理というものでしょう。イースターでも本は売れるものですか。それをあてこんで広告を出しているとは私には思わ

れませんが。

「寄贈本」のことについてですが，貴殿の記載では，ちょうど五十部多く記入されていると思います。

私宛の送り分として	25部
あとからの私宛の分として	50部
住所をお知らせした友人宛の分として	(約) 10部
新聞社その他に	(約) 30部
	115部

私の計算に間違いがなければ，その旨お知らせ下さい。

敬具

C.L.ドジソン

クロフト牧師館，ダーリントン

1866年　8月15日

拝啓

あなたが六月末に収支計算をする，というコーム氏のお考えがもし正しいのでしたら，貴社と私の双方の収支決算について —— つまり，『アリス』の売上げで，どれだけ収入があったか，そこから出版社の収益を差し引くといくらになるか，そして印刷代，製本代，広告代の合計がいくらになるか，また，アメリカに渡った本の私の分の見積りはどうか，等々について，おたずねすることであなたを煩せないようにしたいと思っております。現在のところ，挿絵の費用と，オックスフォードでの印刷代として私が三百五十ポンド支払った，ということ以外には私には何もわかりません。そして，それだけを考えれば気の滅入る話です。

頓首敬白

C.L.ドジソン

クロフト牧師館，ダーリントン

1866年　8月24日

拝啓

お手紙と情況説明ありがとうございました。それを拝見し，とても満足しております。三千部の増刷を考えておられるとのことですが，あなたの気前のよさには少々びっくりしております。これまでの売れゆきを考えると，私はあと一千部でもかなり大きな賭だと思っておりましたので。――しかし，もしもあなたの「もっと安い紙を使う」というご意向に，あの本の値段を安くする（私にはそうするほかないと思えるのですが）というご提案が含まれているのでしたら，このことについては，あなたのご判断におまかせしたいと思います。七シリング六ペンスでは高すぎる，というのが当初からの私の考えだったのですから。

しかし，値段は七シリング六ペンスに据え置くほうがいいとお考えなのでしたら，紙は以前のと同じものを使わなければなりません。[用紙代と本の値段の] 一方だけを下げることには賛成できません。もしそんなことをしたら，「粗悪品が旧価と同じ値段で売られている」と言われるにきまっています。

いつ増刷にかかる予定かを教えていただければ，それにあわせて私が用意した正誤表をお送りいたします。

もしわれわれが三千部増刷を決めるのでしたら，タイトルページに「第五刷一千部」とか「第六刷一千部」とか印刷しておくのがよいと思います。

フランス語またはドイツ語，あいるいは両方に翻訳するという私のアイディアをとりあげてくださり，ヨーロッパ大陸での販売を試みてくださるとのこと，大変ありがたく存じます。フランス語版とドイツ語版への翻訳は，オックスフォードで立派にできると思います。イギリスに入ってくる本の例から考えて，私の本が彼らの言う軽い文学になるのならば，もっと安い費用で装丁し，もっと安く売ってもらえるものと考えます。

紙のことや印刷のことを考え直してみるのはきっともうすこしあとのことになるでしょう。しかしそれとはべつに，私は『アリス』の続篇のようなものを書いてみようという気持ちを心に抱いております。それがかなり明確な形のものになった時には，早い段階からご相談いたすつもりでおります。そうすれば，最初から事がうまく運ぶでしょうから。

敬具
C.L.ドジソン

クロフト牧師館，ダーリントン
1866年　8月30日

拝啓

あなたはほんとうにすばやく仕事をなさる方なのですね！私がこの手紙に同封する正誤表をお待ちいただけなかったのは遺憾です。本の値下げの問題は，出来上がったものを見るまで待ったほうがよいと思います。もし，新しいものがどの点から見ても前のものと同じなら，売出しの格好のチャンスでもないかぎり，値段を変える必要はないのですから。

出来るだけ早く見本刷りをテニエル氏に送っていただきたいと思います。彼に出来ばえを納得してもらえないかぎり，私はこの本の出版に同意することは出来ないでしょうから。

オックスフォードに戻り次第，私のフランス人とドイツ人の友人に会って，翻訳のことについて相談してみるつもりです。

敬具
C.L.ドジソン

アメリカでの売れゆきについての情報がありましたら，お知らせ下さるようお願いいたします。

イースト・テラス，ホィットビー[7]
1866年　9月28日

拝啓

テニエル氏から，増刷したぶんの挿絵の印刷に大変満足しているむね便りがありました(あなたにも，勿論あったことと思いますが)。三千部の印刷費その他がいくらになりそうか，そして値段を下げるおつもりなのかどうかについてお聞かせ願えればありがたいと思います。値段のことについては，もし残部を同じように値下げするのでなければ，最初の発行部数すべてが売り切れるまでは値下げは不可能と考えます。六シリングにすれば七シリング六ペンスの場合よりもずっとよく売れるだろう

とおもいますが，もし値下げして売って，総数で$\frac{5}{4}$倍以上売れれば[8]，明らかに本の値段を変えるだけのことはあると言えましょう。

敬具

C.L.ドジソン

当地の友人に贈りたいと思いますので，書籍郵便で『アリス』を一冊お送り願えませんか。

クライスト・チャーチ，オックスフォード

1866年　10月22日

急啓

ただいま『アリス』を四部受け取りました。これが，前の刷りの残りなのかどうか，あなたのお手紙からは判断出来ませんでしたので，そのことでお便りいただきたいのです。これらは前の残りかどうか，どうぞお知らせ下さい。もしそうでないのなら，私の［正誤］表にしたがって訂正がなされていないことになりますし，私が特に指示したとうりに，タイトルページに「第五刷一千部」と記入されてもいないのが私にはどうにも腑に落ちないのです。

しかし，貴社の印刷所がそんな不注意なことをするとは思えませんので，この謎についてのあなたのご説明をまつことにします。

敬具

C.L.ドジソン

クライスト・チャーチ，オックスフォード

1866年　10月24日

拝啓

先にお送りいただいた四部の『アリス』は新しい刷りのものではないと知って安心いたしました。友人がロンドンへ参りますついでに四部のうちの三部をお返しいたします。それで新しい刷りが出来次第，どうぞ新しいものを三部送って下さい。

オックスフォードの友人たちは，この本はフランス語にもドイツ語にも翻訳不可能だと言っています。語呂合わせと歌が主な障害だということです。もしあなたの外国人のお知り合いで，より好意的なご意見を示

される方がおられましたら，知らせていただけるとうれしく思います。

敬具

C.L.ドジソン

クライスト・チャーチ，オックスフォード

1866年　11月28日

拝啓

新しく増刷された『アリス』の広告を貴社が出されたのを見ましたので，一言申し上げます。前回あなたが選んだ二つの書評以外のものから抜粋して広告に使用されるよう進言します。引用できるたくさんの書評があるのですから，今回も同じものを使用するというのは遺憾に思います。

当方まだ新刷を受け取っておりません。

敬具

C.L.ドジソン

クライスト・チャーチ，オックスフォード

1866年　11月29日

拝啓

本日，書店で新刷の『アリス』の一冊を見てきました。私の目の錯覚でないとすれば，ページの余白が前の刷りのものにくらべて狭く，本の全体的な印象が，だんぜん貧相なものに感じられました。この点に関して私が間違っていないなら，まだ裁断していないぶんについては，出来るかぎりそれを改めていただけますよう，どうかよろしくお願いいたします。もしまえのものより小さな紙に印刷されているのでしたら，今回は改善のしようがありませんが。

七千部以上にも達しているのだったら是非ともまえの体裁に戻さなくてはいけません。どこから見ても立派なものであれば，割りに合う，合わないというようなことは大したことでありません。

敬具

C.L.ドジソン

リポンの公舎にて
1867年　1月5日

拝啓

本の宣伝広告に，敵意のある批評文をそうでないものとまぜて用いる，というあなたのやりかたに敬意を表します。そのやりかたが「あまりに古すぎるジョーク」とは知りませんでした。

ここ二日の間に、私はニューヨークから二冊の刊行物を受け取りました。一冊は，ネイション誌からのもので『アリス』に関する長い称賛の書評が書きこまれたもの，もう一冊は，メリーマンズ・マンスリー誌の十二月号で，あの本の半分ほどのリプリントと十数葉ほどの絵のコピーまで（!）が載っており，最後には「来月号につづく」と書いてありました。とはいえ，本文も絵も印刷はあまりにも粗雑で，この本一冊を買うかわりになるものとは思えません。

申しわけありませんが，下記の住所で，L. S .マクドナルド嬢[9]あてに『不老の泉』を一冊送っていただけませんか。

アールズ・テラス十二番地
ケンジントン

『アリス』の第六刷の一千部の売出しはいつ始められるのか教えていただきたいと思います。

敬具
C.L.ドジソン

クライスト・チャーチ，オックスフォード
1867年　2月6日

拝啓

小切手ありがとうございました。最新の三千部の印刷代の払いを補うのにあなたがたて替えていて下さったとばかり思っていましたので，それを手にしてびっくりしました。

もし，情報の提供がご面倒でないならば，三千部が売れたとして，あなたの収支計算がどうなっているのか知らせていただきたいのですが。

そうしますと，さらにあなたは増刷をお考えだと思いますが，もしそうならば，絵の印刷を，第五刷一千部の絵（それらは，線のいくらかが消えかけていますから）よりも，もっと芸術的なものに仕上げたいと考

えております。さらに，ページの大きさは，第四刷一千部と第五刷一千部の「中間」のサイズがいいと考えます。それをするおもな理由は，近いうちに，『アリス』の続篇を仕上げようとしているからです。そしてもしこれも「中間」サイズで印刷されるなら，三つのサイズ［訳者注：第四刷のサイズと第五刷のそれと，その中間］のいずれかで製本することになる筈です。続篇が完成したら，その出版に反対はなさらないだろうと思っております。

敬具

C.L.ドジソン

［？クライスト・チャーチ，オックスフォード］[ママ]

1867年　2月11日

親愛なるマクミラン様

私は一冊の小さな本をほぼ書きあげました。それを出版していただきたいのです —— どうやら「『アリスの冒険』の作者による」と明記できる本ではないようです。本の題名は「行列式の原理とその連立方程式及び代数幾何学への応用 —— 初心者のために」というものです。いまオックスフォード大学出版部で印刷中で，次の学期に間にあうように，あと一ヶ月かそこらで出来あがる予定です。大きさは八つ折判で，多分百ページくらいになると思いますが，値段はこれから決まります。ただ，いくらになるにせよ何度も修正をくり返したので，私の儲けはないと考えています。いまこのことをお話するわけは，貴社が適当とお思いの時期に広告を出していただけるからです。

発行部数を何部にするかは，いまのところ決めかねていますが，この本の需要が多いことは疑う余地がないばかりか，私はスポッティズウッド氏［Mr. Spottiswoode］の好意的なご意見にも大いに励まされています。氏は行列式の新しい理論の権威であり，この本の大部分を見て下さいました。もし出版をお引き受けくださるなら，またあらためてお手紙差しあげます。部数をどのくらいにすればいいかを教えていただきたいと思いますので。—— それから装丁をどんな風にすればいいかも伺いたいと思っています。いつも貴社が小型の数学書の装丁に使っておられるような緑のクロスに金文字をおすすめでしょうか？

敬具
C.L.ドジソン

クライスト・チャーチ，オックスフォード
1867年　3月19日

親愛なるマクミラン様

フランスの子どもの本が，イギリスやドイツにくらべてよい挿絵のものがほとんどない状態である，という理由から，『アリス』のフランス語訳を出してみてはどうかと強く要請されております。いちばん難しいことは，翻訳をうまくやってくれる人，あるいはいずれにしても，翻訳が可能かどうか判断できる人を捜すことです。ある友人はあなたにパリの大きな本屋のどこかに尋ねてもらってはどうかと私に言ってくれて，そして，誰か適任の作家を知っていそうな人物として「フィルマン・ディドー」[Firman Didot] の名をあげています。あの本の文体になにかある種の共感を持ってもらうために，ああいう種類のものを書いたことがある人か，もし出来れば詩を書いたことのある作家が見つかると望ましいと思います。あのなかの詩が大きな難点で，もとになった詩がフランスで知られていなければ，それのパロディーは全く理解不可能ではないかと思います。その場合にはいっそ省いてしまったほうがいいかもしれません。

このことに関して何かお心あたりはありますか？

敬具
C.L.ドジソン

クライスト・チャーチ，オックスフォード
1867年　3月21日

親愛なるマクミラン様

先日『アリス』のフランス語訳のことでお手紙差しあげたとき，ドイツ語訳のことに触れなかったわけは，私の友人でここのドイツ語の教師をしているバートラム氏 [Mr. Bertram] が，あれをドイツ語に訳せるかどうか判断するために検討してみよう，と約束してくれていたからです。

その結果彼は，出来るという結論に達しました――語呂合わせさえも。そのいくつかを実際にドイツ語に訳してみたそうです。彼が試しにやったドイツ語訳は，もちろん［ドイツ語への］翻訳を引き受けてくれる人に提供されることになります。

どなたかドイツの出版社をとうして，あるいはお心あたりの他のいかなる方法ででも，やってくれそうなドイツの作家を捜してみてくださいませんか？

敬具
C.L.ドジソン

クライスト・チャーチ，オックスフォード
1867年　4月17日

親愛なるマクミラン様

やっと『アリス』のフランス語訳のための素晴らしい翻訳者（と信じています）を見つけました。散文のほうは，じつに見事な出来栄えですが，韻文に関しては，私には判断が出来ません。もし，どなたかフランス語の詩の善し悪しを判断できる方をご存じでしたら，貴社あてに彼が訳してくれた見本をお送りいたします。彼はここのフランス語教師ジュール・ビュエ氏［M. Jules Bué］のご子息です。実際，親子お二人で仕事をして下さっています。

間もなくそちらに前半の部分をお送り出来るでしょうから，フランス語版を印刷する準備を始めて下さって結構と思います。使用する紙は，このまえの刷りに使ったものよりやや大きめで，七シリング六ペンスのものほど大きくはないサイズにしたいと思います。それから絵の印刷を，こないだのものよりもう少し入念に（それとも紙をもう少し上質のものにすればよいのでしょうか。どちらに問題があるのか，わたしにはわかりません）お願いできますか？

あれでは出来上がりがおおざっぱで不完全で，テニエル氏の持ちまえを充分表現しているとはとても言えません。

大博覧会は，パリでの本の売出しに絶好の機会になるだろうと思います。タウホニッツ男爵［Baron Tauchnitz］から何か連絡がありましたか？

あるドイツ女性から『アリス』を翻訳したいという申し出を受けていることを，まだお知らせしていなかったと思いますが，私は彼女に，三十六ページめと百八十三ページ目のところを翻訳してみてくれるようにと頼んでおきました。

フランス語やドイツ語の翻訳料として，どのくらい払えばいいのか教えていただけませんか？

敬具

C.L.ドジソン

クライスト・チャーチ，オックスフォード

1867年　4月19日

親愛なるマクミラン様

英語の本の翻訳ものを出版するやりかたがわからず途方にくれていますので，また教えていただかなくてはなりません。私の本のイギリスでの出版社である，ほかならぬあなたが外国の出版社と交渉のうえ合意を済ませ，本もすでに送ってあるとばかり思っておりました。しかしながら今度の場合，全く新しい出版社を見つけなければならず，問題すべてをあなたの手を借りずに，その出版社と私と印刷業者の間で簡単に決着をつけるように，とお考えのように見受けられますが，そうなのですか？もしそうならば，私の友人たちに質問状を出して意見をたずねたいと思いますので教えて下さい。私は難しいとはおもっていないのですが，損してまでもと頼むのではないのに，なぜ外国の出版社がこの計画が成功するかどうかばかりを問題にするのか理由が分かりません。リスクはすべて私がこうむるのであって，相手は売れた本のぶんだけ儲かるのですから，売れゆきがいいか悪いかをきめる心配などする必要はないはずです。

しかし私は，ことがら全体をよくわからずに［いま手紙を］書いています。翻訳の費用はたいしてかからないようですから，二人の翻訳者にはいまのところ続けてやってもらいます（仕事のできばえに満足のゆくかぎりは)。翻訳が「ヒット」しなくても大して問題ではありません。クレイ氏がフランス語かドイツ語か，あるいは両方とも印刷してくれればいいと思っています。この連絡をあなたがやって下さるかどうか，それ

とも私が直接クレイ氏に問い合わせるべきかどうか，お知らせ下さい。

敬具

C.L.ドジソン

クライスト・チャーチ，オックスフォード

1867年　6月10日

親愛なるマクミラン様

今晩の便で『アリス』のフランス語の原稿をお送りします。いろいろ考えなければならない問題（詩や語呂合わせ等々）がありまして，それについて友人たちの意見と提言を集めたいと思いますので，全体をゲラ刷りにしたものを二十部送っていただけますならば最善と思います。それを友人たちに配り，寄せられた意見を熟慮したうえで具体化するつもりです。そのあと挿絵の入るページの割りつけをするために，そちらに返送いたします。

敬具

C.L.ドジソン

クライスト・チャーチ，オックスフォード

1867年　6月13日

親愛なるマクミラン様

フランス語版『アリス』にかんして起こりうる手違いをふせぐために，組版はどこも変えないで，二つの版を出来るだけ正確に符号するようにしておきたいと考えています。

ねずみのしっぽ［の形の詩］は，とりあえず直立の柱の形でいいと思います。使う語句がはっきり決まるまでは，わざわざジクザグにするまでもありません。

紙は，最初の版ほどではなくても，このまえの版よりは余白を少し広くとれるサイズのものを注文していただきたいのです。紙の質は最初の版のものと同じくらいのものにしたいと思っています。その種の紙に印刷された絵の繊細（デリカシー）さは，このまえの印刷のものをはるかに凌いでいますから。

敬具

C.L.ドジソン

追伸

木版をもとにして刷った印刷（フランス語版用の紙かと思われます）を見た友人が，その方法でやった「アリスのクローケー遊び」の絵を見たいと言っております。それを一枚やっていただけませんか？

ドイツ語訳の印刷業者のために，電気製版によるものをもう一組つくることは，むだなことではありませんね？

クライスト・チャーチ，オックスフォード

1867年　6月18日

拝啓［訳者注：この手紙はクレイク氏[10]宛］

あなたがクレイ氏に「アリスのクローケー遊び」の絵を一枚押し刷り［print］するように頼んで下さった，とのことですが，さきの私の注文を，読み違えておいでではないかと気になっております。ダルジェル[11]がやったのは，木版の版型（ウッドブロックス）からやわらかいフランス紙に木版画を押したのだと思います。そのために，電気製版のものをもとに印刷したどれよりも大変繊細な仕上がりになっています。

ところで，木版の版型はどなたがお持ちなのでしょうか。それらが注意深く保存されているのを疑うつもりはありませんが，それらに私が支払わなければならなかった金額の合計を考えますと，それらが損傷の危険がまったくないことを確かめられたらうれしいと思います。

今度の英語版『アリス』は，何部印刷するご予定でしょうか。その時には，いくつかの正誤表をお送りしたいと考えています。

敬具

C.L.ドジソン

クライスト・チャーチ，オックスフォード

1867年　6月24日

拝啓［クレイク氏宛］

私は「アリスのクローケー遊び」の絵のゲラ刷り三枚と，ダルジェルから手に入れたオリジナルのものとを比べてみました――三枚の絵はどれもまったく良くないものでしたし，印刷された本の絵よりも少しも

良くはありませんでした。それはおそらく，絵も普通のやり方で印刷してしまったからだと考えます。――私は，クレイが私のお願いを実行してくれなかったのではないかと考えております。ダルジェルが「手で刷り込む」と言っている工程が，実際にどういうことを意味するのかは私には分かりませんが，そうして仕上げた結果は細部まで繊細に出来あがっています。印刷された本や，あなたが送ってくれた三枚のゲラ刷りにはそれが見られませんでした。

フランス語版が二十部刷れましたら，四部だけ私宛に，残りはこれからお送りする住所の宛て先にそれぞれご送付願います。

敬具

C.L.ドジソン

モスクワ[12]

1867年　8月18日

拝啓［クレイク氏宛］

送り先の住所のリストが出来なかったためにお返事が大変に遅れてしまいました。ご迷惑をおかけしたのではないかと恐れております。

マクミラン氏と同じように，あなたも英語版『アリス』を二千部か三千部印刷するのがよいとお考えの由，私の考えでは，第十刷の一千部が全て一様な仕上がりではなかった例もあるので，二千五百部を越えないほうがいいと思います。余白は広めに，絵の刷りはより完璧にやってくださるよう希望します。第七刷の一千部のものの何冊かが手もとにありますが，絵がまるですりへった版型から刷られたようなので，寄贈する気になれません。

いまフランス語版『アリス』を印刷するのはまったく不可能です。実際，おそらくは何らかの変更が加わるでしょうから，ページに組んでもたいして役に立たないでしょう。もしあなたが，フランス語版の棒組の校正刷りを，下記宛に郵送して下さると大変ありがたいのですが。

三部を　M. B. スメドレー嬢宛[13]
　　クロフト・テラス
　　テンビー，サウス・ウェールズ

一部をオックスフォードのクイーンズ・カレッジの特別研究員のケイプス氏[Mr. Capes]宛に。名前のイニシアルは大学便覧をあたってみて下さい。おもてに「転送されたし」と書き，私が同封するメモも添えて送って下さい。

三部は，オックスフォードのクライスト・チャーチの私宛にして下さい。今から三〜四週後には戻る予定です。

敬具

C.L.ドジソン

クライスト・チャーチの私宛の手紙は，転送されるでしょう。

クライスト・チャーチ，オックスフォード

1867年　10月9日

拝啓［クレイク氏宛］

私はまだ，ドイツ語版『アリス』のどれも見ていないのです。わたしに半ダースの校正刷り（印刷業者がすぐに用意できるくらいの数だと思います）を，いつ送って下さいますか。私は友人たちにそれを見せて彼らの意見や訂正などを求めたいと思っているのです。特に詩は，まったく書き直さなければならない公算が大きいのです。そのようなわけで，何部印刷すべきかという問題を考えるのにはまだ時間がかかります。その点については，マクミラン氏の御意見も伺いたいと思っております。もしすぐにでも，それらすべてを活字印刷したものが入手できれば，友人たちと意見を交換するのに非常に好都合になります。おたくの印刷所では，活字をたくさん賃貸しで借りる，ということは出来ませんか？ロンドンには，無理すれば一冊の本をまるごと三度も印刷できる印刷所もあるに違いありませんから。断片的な組み方では，一冊の本の部分ごとの調和がとれなくなる危険もあります。

手紙からの抜き書きのことについては，マクミラン氏のご判断をまつ次第です。よろしければ，「以下の文章は，子どもたちの手紙そのものから字句を変えずに抜き出したものであることを，この本の著者が保証します。」とはじめに書いて，以下に他のものをつづけてもいいと思います。

敬具
C.L.ドジソン

クライスト・チャーチ，オックスフォード
1867年　12月8日

親愛なるマクミラン様

サタデー・レヴュー紙が「クリスマスの本」についての連載記事を出しているのを見ました。まだつづくようですが。私の知るところでは，同紙はまだ『アリス』を全然取り上げていないようですが，マクミラン社から試験的に一冊送ってみてはいかがでしょうか？

『行列式』に関する拙著はまだ届いておりません。本の値段はあれで結構だと思います。もちろん、あなたが適当とお考えの評論雑誌に何冊かお送りくださるでしたら，あなたにお任せいたします。ペル・メル紙の編集者を知っていますので，この雑誌名を挙げましたが，彼に手紙を書き，こちらの意向を伝えておきました。

敬具
C.L.ドジソン

追伸　今年のクリスマスに『アリス』がよく売れそうなきざしは何かありませんか？

九千部が売れれば，「第十刷の一千部」のためにはとても効果的な宣伝になりますから，近刊予告の出しかたも気楽にできると思います。

ところでカインド・ワーズ誌[14]の抜粋を送ってくださってありがとうございました。この雑誌の編集はどなたがやっておられるのかご存じですか？

クライスト・チャーチ，オックスフォード
1867年　12月10日

親愛なるマクミラン様

あなたが送ってくださった引用文は，1866年12月22日の，スペクティター紙に載った書評の一部です。おなじ日付のサタデー・レヴュー誌にあたってみましたが，似たようなものはありませんでした。そのことに

気がついたのは幸運でした。サタデー・レヴュー紙の書評氏が，間違った出典に言及している広告を見ていないといいのだが，と思っております。

『行列式』の本，届きました。あの茶色の表紙がじつに見事です。

敬具

C.L.ドジソン

クライスト・チャーチ，オックスフォード

1868年　1月24日

親愛なるマクミラン様

もしおさしつかえなければ（そしてお手間でなければ），『アリス』の発行ごとの収支計算の明細書をこしらえていただけないでしょうか。私は、それぞれの発行で，部数がどれくらいさばけたか，例えば，第三刷一千部の場合は，第四刷一千部の場合はという具合にして，紙代，印刷代，製本代，広告代はそれぞれいくらかかったか。そしてその売上げでいくら儲かったか(私についても)，を知らせていただきたいのです。同じように，第五刷，第六刷，第七刷 —— そして間もなく売り切れる見込みの最新の二千五百部についても。

今度の発行は何部になりますか？

それからドイツ語版の組版の進み具合はいかがですか？

活字を賃貸で借り入れるのに（もし必要ならば）喜んで費用を負担したいと思います。そうすれば，少しずつ印刷してもらうのよりも，私の友人たちにこの本全体についての批評をしてもらうことが出来るのですから。

もうひとつ質問があります。『アリス』の続篇の中で，一ページか二ページを裏返しに印刷していただきたいのですが，その方法がありますか？あるいはなにか方法が見つかりそうですか？

つまりこんなふうにです。

Oxford and London.

もしいい方法がなければ，紙の上に活字を押して，インクが乾くまえ

に版木に転写して，それを彫って上の絵のように電気製版すればそれほどむづかしくはないと思います。

クレイク氏は，私に『アリス』が今までと同じように売れつづけることを期待すべきではない，だがそのうち比較的少数の年間売上げ数に定着する，と申しました。あなたもそんな予測をなさいますか？

敬具

C.L.ドジソン

追伸　ペル・メル紙に載った『行列式』の書評を手に入れました。他にも書評が載りましたか？本は売れそうな様子ですか？

〔注〕

1．C.L.ドジソンは筆名ルイス・キャロル。ここに扱った手紙は *Lewis Carroll and the House of Macmillan* (ed. by Morton N. Cohen and Anita Gandolfo, 1987, Cambridge University Press) をもとにしている。訳出した手紙は pp.35-59までのものでマクミラン社の社主 Alexander Macmillan 宛のもの。(ただし例外四通を含む)

2．詩人 Coventry Patmore 編さんによる *The Children's Garland from the Best Poets* (1863, Macmillan 刊) のこと。

3．　ヨークシャー州クロフト。聖職者であった父親の任地。

4．「びっくりするような見積もり」とは，初版本の出版直後にそれを見たテニエルが，絵の印刷に不満がある旨ドジソンに伝えたため，ドジソンがマクミランにもちかけた刷り直しの相談に対するマクミランの見積もり概算のこと。

5．Thomas Combe，ドジソンをマクミラン氏に会わせた人，オックスフォードのクラレンドン・プレスの支配人。

6．ドジソンの父親は，1852年以降，ヨークシャー州リポン大聖堂の聖堂参事会員。その公舎。休暇にはドジソンも帰省して家族と過ごした。

7．知人の Mrs. Hunton 邸。以前からドジソン一家が夏休みに滞在していたところ。

8．わかり易く言いかえれば，7s 6d は90ペンス，6s は72ペンスだから $\frac{90}{72}=\frac{5}{4}$ になる。つづけて「明らかに値下げをする価値がある」と言っているのは，かねてからドジソンは，この本の価格が高すぎると思っていることを含んでいる。

9. Lilia Scott MacDonald は George MacDonald の長女。*The Letters of Lewis Carroll* (ed. by Morton N. Cohen, 1979, Macmillan) によれば，ドジソンは彼女にその頃マクミラン社から出版された，ドイツの作家 Frederik Paudin-Müler 著『不老の泉』(*The Fountain of Youth*) を新年のプレゼントとして贈っている。(pp.95-6参照)
10. 6月18日付，6月24日付，8月18日付および10月9日付の四通の手紙は，マクミラン社の George Lillie Craik 氏(1837-1905)宛のもの。
11. Dalziel は，兄弟 (George, Edward, John, Thomas) いずれも当時最も著名な下絵師で彫刻師。
12. ドジソンは，1867年7月13日から9月14日まで，同僚 H. P.リドン氏 (Henry Parry Liddon) とともにロシア旅行をしている。
13. Menella Bute Smedley (1820-77)はドジソンのいとこで詩人。ドジソンを作家として世に送り出す手助けをした人物。
14. 1867年2月に創刊された少年少女のための週刊誌。

TRANSLATIONS

Translation of Donald Hall's Poems

Yorifumi YAGUCHI

The letters of C. L. Dodgson from *Lewis Carroll and the House of Macmillan*

Kumiko TAIRA

北星学園大学文学部　北星論集第30号　正誤表

頁・行目	誤	正
P.22, 〔注〕17),	v.11.28～38.	V. 11.28～38.
P.22,〔注〕24,26)	「上掲書」	「前掲書」
P.23,〔注〕35) P.23,〔注〕37	iv. 1 － 4 v.11. 15～24	IV.11. 1－4 V.11. 15～24
P.23,〔注〕49)	「上掲書」	「前掲書」
P.24,〔注〕57)	「上掲書」186～214を…	「前掲書」,186～214ページを
166ページ11行目から 12行目にかけて	私は,	トル
214頁18行目	(白判を除く)	(自判を除く)
226頁(3行目)	Selected Thankas	Selected Tankas